

令和6年度入学式 学長式辞

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。ようこそ、鹿児島国際大学へ。本学の全教職員を代表して心から歓迎申し上げます。

この大学を運営する学校法人津曲学園は、昨年2023年に創立100周年を迎えました。創立者津曲貞助が、学びへの意欲はあってもその機会に恵まれない若い女性たちのために、1923年に旧制の高等女学校を設立したのを皮切りに、時代の変化と地域の要請に応じて各種の学校を整備し、今日までに、鹿児島国際大学、鹿児島国際大学大学院に加え、鹿児島高等学校、鹿児島修学館中学校・高等学校、鹿児島幼稚園を運営する一大学園へと成長し、今なお発展し続けています。本学においても、昨年、学園の100周年記念事業の一環として、4番目の学部となる看護学部を開設したところです。101年目の春に、この学びのコミュニティに加わってくださったみなさんとともに、先人たちが大事に育ててきたこの学園と大学の新しい歴史をかたち作っていくことを楽しみにしています。

さて、私は学長として昨年から「地域から世界へ」という授業を担当しています。毎回、地域の諸課題にグローバルな視野をもって取り組み成果を挙げている経営者や自治体の首長などをゲスト講師として招き、これまでの歩みや現在の活動のこと、学生たちに期待することなどをざっくばらんに語っていただくという授業です。講師のレクチャーを聞いた後、学

生みなさんから質問やコメントを出してもらいますが、ある時、毎回のように複数寄せられるお決まりの質問があることに気づきました。

ふたつのパターンに大別できるのですが、ひとつは、「これまでにどのような失敗をしましたか?」、「仕事で失敗した時に、どのように立ち直りますか?」というもの。もうひとつは「自分は、失敗することが怖くて、新しいことに挑戦することを躊躇ってしまいます。どうしたらいいでしょう?」、「自分は、失敗するといつまでも引きずってしまいます。どうしたら次のステップに進めるでしょう?」というものです。どんなことでも挑戦には失敗が付きものということは分かっている、失敗するのは怖い。従って、挑戦するのは怖いという、学生たちの素直な心情が読みとれます。

ゲスト講師は、いずれも、どちらかといえば「成功者」のカテゴリーに入るような人たちですが、どなたも、学生たちのそんな心情に寄り添って、自身の失敗談や、失敗を次に活かすための気持ちの切り替えかたについて、お話ししてくださいます。そして、どなたも必ずおっしゃるのが「成功よりも、失敗から学ぶことの方が多い。いやむしろ、失敗からしか学ぶことはできない」ということです。

先日(3月13日)、みなさんもニュースでご覧になったと思いますが、スペースワンというスタートアップ企業が和歌山県串本町の発射場から打ち上げた小型ロケット「カイロス」初

号機が、発射直後に爆発しました。人工衛星を宇宙空間の軌道に投入するという、日本の民間ロケットとしては初めてのミッションに挑み、固唾をのんで見守る関係者や一般市民の目の前で無惨に大破したのです。しかし、会見で豊田正和社長は、「スペースワンとしては『失敗』という言葉は使いません。なぜなら、ひとつひとつの試みの中に新しいデータと経験があり、それらがすべて、今後の新しい挑戦に向けての糧だと考えているからです。それが会社の文化だとお考えください。私どもは、これで諦めるつもりはまったくございません」ときっぱりと言い切り、話題になりました。先行する民間宇宙企業スペース X の CEO イーロン・マスク氏も X (旧ツイッター) に、「ロケットは難しい (Rockets are hard)」と書き込んで、マスク氏らしい暗示的な表現で後進の企業の挑戦にエールを送りました。スペース X 自体も、今でこそ、高いミッションの成功率を誇りますが、ここに至るまでには数多くの失敗の歴史があり、現在もなお失敗を繰り返しながら新しい挑戦を続けているのです。

難しいミッションであればあるほど、試行錯誤を繰り返さなければ、成功にはたどり着くことができないということは、理屈としてだれもが理解していますが、失敗という事象を見ると、そこだけを切り取って、「失敗した」と揶揄したり、また揶揄されて落ち込んだりするのが人の常です。しかし、より長いスパンでものを考えられる人は、失敗から学び、何度失敗してもそれを糧にして一歩ずつ進み、最後には成功に到達します。また、そういう経験をした人は、果敢に挑戦し失敗した人に対して惜しみない敬意を払います。トマス・エジソンが白熱灯を発明した時、新聞記者から「1万回失敗したのでは？」と問われ、「私は失敗した

ことは一度もない。1万通りのうまくいかない方法がわかっただけだ」と答えたという有名な逸話があります。これくらいの楽天性とチャレンジ精神があったからこそ、エジソンは優に1000件を超える発明と技術革新を果たし、「発明王」と呼ばれるようになり、その言葉は、後に続く挑戦者たちを励まし続けているのです。

退職や人事異動の時の挨拶に、「お陰様で在職中、大過なく勤めることができ感無量でございます」という決まり文句があります。大きな失敗をせずに（大過なく）勤めることができたことに感謝する表現ですが、これは、世の中がよほど安定しており、しかも右肩上がりに成長している時代だからこそ成り立っていた定型表現でしょう。過去の成功事例をモデルに、マニュアル通りにハンドリングしていれば、物事は順調に進んでいくという時代には、失敗しないことに至上の評価を与える価値観が支配的になるのも無理はありませんが、今はどうでしょう？ 今はそんな時代でしょうか？ 私たちが生きているこの時代は、かつてほど安定もしておらず、かつてよりも変化に富み、しかも右肩上がりの成長は期待しにくい時代です。「大過なく勤め上げられて感無量」ではなく、「大過も小過も数多くありましたが、それらを糧に成功を収められて感無量です」という挨拶がスタンダードであるような世の中に、私たちはもうすでに生きているのです。

いずれ大学を卒業し、このような世界で活躍することが期待されているみなさんにとって、大学は、安心して何度でも失敗の経験が積める場所でありたいと思います。失敗から学び、

失敗を糧にして成長できる場でなければならないと思います。失敗したり間違えたりすることが恥ずかしいではありません。失敗したり間違えたりする人を馬鹿にしたり、笑ったりすることが恥ずかしいのです。

「カイロス」初号機が爆発した瞬間、現場近くから発射を見守っていた市民たちは、思いがけない結果に言葉を失い、静まり返ったそうですが、しばらくしてから誰からともなく拍手が起こったそうです。失敗したとはいえ、難しいミッションに果敢に挑んだ関係者を称える拍手です。この温かい拍手のなかに、現代という難しい時代を生きるすべての私たちにとっての希望の光が見てとれるように、私には思えます。

鹿児島国際大学の卒業生の評価として「突破力」を挙げてくださる、企業経営者の声をよく聞きます。「突破力」というのは、課題の困難さに臆せず、なんと失敗しても成功するまで諦めずに挑戦する力という意味らしいですね。これからの時代は、そのような意味での「突破力」がますます求められる時代になっていくでしょう。みなさんが、先輩たちのバトンを引き継ぎ、この大学で「突破力」を身につけ、やがて社会で「突破力」を大いに発揮し活躍してくださることを信じています。

今日、みなさんは、鹿児島国際大学という学びのコミュニティの一員として迎え入れられました。大いに失敗し、何度も間違えながら、一歩ずつ着実に「突破力」を磨いていきましょ

う。教職員一同、みなさんの歩みに寄り添い、心を尽くして成長を手助けします。みなさんに、心からの「おめでとう」を重ねて申し上げ、入学式の学長式辞といたします。

令和6年4月4日

鹿児島国際大学学長 小林 潤司